

## ロータリー発展の要因・感激と魅力



第252地区ガバナー

(宮城・岩手) 及川 俊平

20年近くになるロータリー生活を振りかえってみたい。義兄にすすめられて北上RCのチャーターメンバーになったのであるが、大方の会員がそうであるように初めの一年くらいは例会の日を忘れて欠席したり、なんとなく窮屈でこれは大変なものに入ったと思ったこともあるが2年3年と経つにつれて慣れてしまったのか例会出席も苦痛ではなくなった、というより祝祭日と重なって例会が欠けたりすると何か物足らなさを感じるようにさえなる。

10年前に私が中心になって北上西RCを創るとき、入会を渋る人達に私は次のように言った『まず入会してみなさい。きっと入会してよかったと思うようになるから』と。ロータリーの効能を説明するよりも自分の体験を信じこませることに努力し、会員の募集は1カ月で完了したのであった。その時私の言葉を半ば疑いながら入会した人達は、10年後、今や立派なロータリアンとしてクラブ活動を活発にやられている。

このように一度入会すると辞めるどころか、すっかり落ちついてしまう。会員はそれぞれ仕事をもち、多忙な所にもってきて、また安くない会費を払って毎週例会に出席している。これはなぜであろうか。どこに魅力があるのであろうか。

この間のボカ・ラトンでの協議会でも各リーダーから色々お話があったが、なんといっても

ロータリアンに感激をもたせることが大事であるということであった。例会における会長の、また地区協議会や地区大会におけるガバナーのスピーチを中心にした感激を呼びおこすもの、国際大会においては特にその点に重点をおくべきもの、参加者の感激を振り立たせる企画運営でなければならないこと。

この感激とはなんであろうか。

人間は理屈だけで動くものではない。“人生意気に感ずる”という昔からの日本の言葉がある。理屈よりも感激で動く方が多いのではないか。

世の中にはいわゆる“世なおし”的運動が沢山ある。国や県やその他の自治体の行なうすべての行政は良き社会の建設のために推進されているはずである。しかしこの行政的活動は実は社会のニーズに对应しているとは必ずしもいわれない。そこにはお役所のおぎなりがあり、もっとも欠けているのは人間的温かさである。要するに制度を生かすのは心であり、ロータリーでいう奉仕の心であろう。われわれは他人に奉仕することに喜びを感じず。

そこでロータリーの現在の世界的活動にまで拡大発展された要因は何んであろうか。会員が感激をもち、魅力にとりつかれ、自らをある程度犠牲にしてまで奉仕に挺身するのであろうか。その根底をなすものはなんであろうか。答は実に明白である。